▼最優秀賞受賞作品（評論）

七十（ななじゅう）の夏（大木実の詩と共に）

平　英男

一

川のゆくえ

枯草のかげ　小石のうえ
僕らが毎日わたる
橋のしたをながれて
大きな大きな川になるのだって

いくつかの村を通り
いくにちかの旅をして
川しもは海になるのだって
そこには大きな町と港があるのだって

ここは山の分教場
僕らは山の子
山を眺めながら　雨の午後
先生は遠い国の話をしてくださった

ああ僕らの知らない海
にぎやかな大きな町
僕らはいつかゆくだろう　川をくだって
僕らはみるだろう　ほんとうの海を

『路地の井戸』（昭和二十三年）

今から五十年以上も昔、私が中学一年生の頃のことである。世の中全体が貧しくて、みんながお腹をすかせていて、一クラスが五十人以上の鮨詰め教室で……、運動が苦手で友だちも少なかった私にとって、そんな中学生活はある意味苦痛だった。

体育の授業のソフトボールで、（どうか球が飛んで来ませんように）と祈るような思いでライトを守っていた自分のことを、今は笑って思い出すことができるが、その時のやるせない気持ちを思うと、やはり胸がキュンとする。

休み時間にカビ臭い図書室で、ポツンと一人本を読んでいる……、そんな屈折した中学生活だった。

教科の授業も、厳しい先生が揃っていて決して楽しいものではなかった。小学校と違って、何かというとすぐに殴られるのにも閉口した。クラブ活動にも入らず、クラスにもなじめず、暗い中学生活だったが、そんな中で国語の授業だけがホッとするような時間だった。国語の先生は大学を出たばかりの若い女の先生で、その先生も厳しかったが、情熱的な指導と、時々脱線する面白い話に、いつの間にか引き込まれていった。

その国語の教科書に、『川のゆくえ』が載っていたのだ。「詩の鑑賞」と題して四つの詩が紹介されていた。『川のゆくえ』の他は、三好達治の『鹿』と高村光太郎の『ぼろぼろな駝鳥』だったが、あと一つはどうしても思い出せない。

私は『ぼろぼろな駝鳥』はまだしも『鹿』はさっぱりわからず、詩というものは何と難しいものか？と思ってしまった。

しかしこの『川のゆくえ』だけは、言

葉も平易でリズムがあり、山の子どもたちの海へのあこがれがほんとうによく伝わってきた。体も弱く、友だちもなく、屈折した暗い毎日を送っていた私は、山の分教場の子どもたちの海へのあこがれを詩ったこの作品を、自分と重ね合わせていたのかもしれない。

先生がそれぞれの詩についてどんな授業をされたかということは残念ながら全然覚えていない。ただ期待していた『川のゆくえ』はサラッと流しただけで、ちょっとがっかりしたことだけは記憶に残っている。

単元が終わると、先生は四つの詩のどれかを暗誦して、みんなの前で発表するという暗誦朗読大会を計画した。みんなはブツブツ文句を言っていたが、どうせやらなければならないのなら、一番短い『鹿』にしよう、という声が圧倒的だった。先生は「『鹿』が一番難しいよ」と言っていたが、うまく朗読するより、短くて暗記の楽な『鹿』を選ぶのは当然といえば当然のことだった。

小学校の時ずっと放送委員で、校内放送のアナウンサーをやっていた私は、朗読には自信があった。（私の出身小学校は放送コンテストで入賞するような放送教育に力を入れている学校で、コンテストの前など放課後遅くまで、朗読やアナウンスの練習をさせられた）

しかし『鹿』はどう読んだらいいのか、どう感情を入れたらいいのか、さっぱりわからない。第一、この詩自体がわからないのだ。

『川のゆくえ』なら誰よりもうまく発表できる自信がある。この詩の気持ちは誰よりもよくわかる。気持ちを込めて朗読することができる。私は『川のゆくえ』がやりたくて仕方がなかった。けれどクラスの大多数の声を無視して、自分だけ違う作品を発表する勇気がどうしても出なかった。同じ小学校出身の者は、私が朗読が得意なことはある程度知っているだろう、しかしクラスには他の小学校出身の者もたくさんいる。そんな子たちに「おっ！エエカッコして」と思われることが恐怖だったのだ。大勢の前で自分の頑張っている姿を素直に出せない自分がいた。そしてそんな自分がとても嫌だった。

結局、発表は不本意なまま『鹿』をいい加減にやって終わってしまった。そしてその時自分を出せなかったことをずっと後悔して引きずってきた。『川のゆくえ』の詩に対しても申し訳ない気持ちでいっぱいになっていた。

そんなこともあり、『川のゆくえ』は、当時の映画スターと同姓同名だった作者の「大木実」の名前と共に忘れられないものになったのである。

二

栖の若葉

あれは
何という木だろう
いま生まれたばかりのようなうすみどり
梢梢に揺れながら若葉は花のようだ
花のように美しい
「栖の若葉だよ」
友はこたえながら

「君は何も知らないね」と笑った
本当に私は何も知らない
木の名も
草の名も
それは私が街で育ったためだろう
そして草や木の美しさを知らなかった
　ためだろう
私は知りたい
眼に沁みる　楢の若葉よ
世界はいつからこう美しかったろう
そうしてそれは何故だろう

『遠雷』（昭和十八年）

その後、大木実の詩を読んでみたいと思ったが、中学校の図書室で見つけることはできなかった。三好達治や高村光太郎の詩集はあるのに、なぜ大木実の詩集はないのだろうと、残念な気持ちでいっぱいだった。

話はそれてしまうが、図書室で読んだ『ぼろぼろな駝鳥』は、最後に、人間よ／もうよせ、こんな事は／の二行が挿入されていた。もちろんこちらの方が原作で、教科書は最後の二行がカットされていたことは中学生の私にも容易に想像できた。（なぜ省略するのだろう、最後の二行があった方がずっと心に響くのに）と不思議な気持ちになったことを今も覚えている。

その頃、筑摩書房から『現代日本文学全集』が刊行されていて、毎月一冊ずつ新刊が配本されていた。私の家でも父がそれを購読していたが、私も時々読んでいて、芥川龍之介や森鴎外の作品、山本有三の『路傍の石』などはそれで知った。

確か中学三年生の頃だったと思う。『現代詩集』という巻が届けられた。その中に大木実の詩が十九編、掲載されていたのだ。（それは第一詩集『場末の子』から第八詩集『天の川』までの詩集の中からの抄編であったが、今読み返しても珠玉の詩が選ばれていて、ベストの選択であると感心する）

私はドキドキして、胸をふるわせながらむさぼるようにそれを読んだ。どの作品も素晴らしかったが、なかでも『楢の若葉』にまいってしまった。

……
眼に沁みる　楢の若葉よ
世界はいつからこう美しかったろう
そうしてそれは何故だろう

「世界はいつからこう美しかったろう」というところで、どうしてこんなに素直に物事を見ることができるのだろうと、作者のナイーブな感覚に完全に打ちのめされてしまった。

大木実の詩はどの作品も、難しい言葉は一つもない。読めばすぐに全部わかり、ジーンと心に沁み渡っていく。これこそが本当の詩だ、と中学生の私は、大木実の詩がますます好きになっていった。

私はこの『楢の若葉』は大木実の代表作だと思っているのだが、どうも世間の評価は分かれるようである。……世界はいつからこう美しかったのだろう、というような直接的な表現は、詩の世界では敬遠されることもあるようだ。しかし観念だけをひねくり回した詩よりも、こんなストレートな表現の方がより心に響くこともあるのだ。現にこの詩に打ちの

めされた人間がいるのだから……。

この作品は昭和十八年発行の第四詩集『遠雷』の一編である。昭和十八年といえば、戦争の真最中で、大木は海軍に召集されていたが、幸いにも当時は霞が関の海軍軍令部第十課配属で、ここは会社勤めのように朝八時出勤で、夕方六時には自宅に帰り、日曜日は休みが多く在宅ができた。だから詩集も出版できたのであろう。

『遠雷』にも、前略／われらもつぶてとなつて／亜米利加英吉利を撃ち倒すのだ／一億のひとりひとりが四方に飛び／日本を世界に花咲かすのだ／　とか、地図をひろげて驚く／日本はこんな小さな国だったのだ／この小さな日本が亜米利加英吉利と戦っているのだ／歴史にかつてない戦果をつぎつぎと挙げているのだ／後略　といった詩が載っている。

大木実がこんな詩を書いていたのも驚きだが、そんな詩の中に『楢の若葉』のような純粋で美しい詩が混在している方がもっと驚きである。

ただこんな表現は作為的だとか、稚拙だとか取られることが多い。現に他者の作品で作為的な表現の詩に何度も出会ったことがある。しかし、「世界はいつから……」と詩った大木実の場合、本当に心の底からそう感じているのである。そこには作為や技巧は微塵もない。それが見抜けないようなら、そんな人は『詩』を語る資格はない。

高村光太郎は大木の第三詩集『故郷』に序文を寄せているが、そこでこう述べている。

……素直な芸術というと、人はよく稚拙の美を連想しがちであるが、この詩人は決して稚拙ではない。むしろつつましいが潔癖なくらいの語感を持っていて、それで甚だ自由に的確に、いかにも表現に価するだけのものを表現している、篇中「秋の貌」というような才気の目立つ作もあるほど技術を内に蔵している。しかも詩全体はほとんど無技巧のようにしか見えない。こういう詩を何と品類していいのか私には分からない。けれども読むと打たれる。日本に於ける質素な、かくれた生活そのものの詩が、さびしいけれどもたのしく、力まないけれども決然とした覚悟を以ってひびいてくる。われわれ日本人の持つ一つの美しい資質が此所にあると思うのは喜である。……

これは大木詩の本質を簡潔に言いえたものであろう。

現在、入手可能な大木実の個人詩集は、童話屋の田中和雄が二〇〇九年に編集した『きみが好きだよ』だけだが、この詩集は大変良くできている。

大木実の詩が大体年代順に並べられ、結婚、応召、復員、子育てなど彼の貧しい、けれど誠実な生活が手にとるようにわかり、心を打たれる。（孫のことを書いた詩を我が子のように配列してあるのは、どうかと思うが、これは編者は承知のうえ、やったことだろう）

しかしこの本には『楢の若葉』は収録されていない。自分の妻に「君が好きだよ」と恥じらいも照れもなく言える大木実の素直さに感動して、詩集の題名にまでした田中が、『楢の若葉』を評価していないのはどうしてだろう。少し残念である。

昭和六十年に長野県の小さい出版社、終日閑房より『うばぐるま』という詩画集が出版されている。これは大木実の各詩集から一作ずつを選んで、梶山俊夫が和紙に水墨画のような画を描いたものを、十四枚、畳紙に入れて出されたもので、限定三十五部、もうこれは趣味の域を出ないようなもので、残念ながら私は所有していない。さいたま文学館でそれを見ることができたが、梶山俊夫の画が、見事に大木実の詩の世界を表現していた。

その『うばぐるま』には、第四詩集『遠雷』からは『楢の若葉』が選ばれている。この選択は大木自身か梶山俊夫かわからないが、（おそらく両者の協議だと思われる）大木自身も『楢の若葉』を気にいっていたことがうかがえる。

『楢の若葉』は傑作なのだ。

三

モーツァルト

死ぬということは
モーツァルトを聴けなくなるということ
　　とだ

アインシュタインがそう言ったそうだ
その本を僕は読んでいないので
言いかたが違っているかもしれない

生きているということは
モーツァルトを聴けるということだ

何を聴こうかと選ぶに迷い
今夜もひとときひとり聴く

この深いよろこび
この大きなしあわせ
生きているあいだ　生きているかぎり

『七十の夏』（昭和六十二年）

それから何年か過ぎた。その間、大木実の詩は時々見かけることはあったが、個人の詩集は見つけることができなかった。ところが平成二年の十月、書店に大木実の詩集があったのだ。

四日市の商店街の中にある「白揚書房」（今はなくなってしまったけれど）の二階には詩集のコーナーがあり、そこはたまに珍しい本に出会うので、前から時々覗いていた。しかしその数年前から車で通勤するようになったため、街中の本屋には自然と足が遠のき、郊外の大型書店の方を利用するようになっていた。一年ぶりくらいにたまたま立ち寄った時に、大木実詩集に出会ったのだ。

それは思潮社発行の現代詩文庫の一冊で、平成元年十二月発行のものであった。発行されてから一年近く知らなかったわけで、本屋の片隅で、ひっそりと私が来るのを待っていてくれたような気がして、うれしいような申し訳ないような気持ちで、ドキドキしながら買い求めた。まるまる一冊大木実ということに興奮し、しかも小さい活字で二段組に、ぎっしりと詩が詰まっていることに喜び、一気に読んでしまった。今まで知らなかった作品や、一度何かで読んだけれど、それ以来載っている本がわからなくなって

しまって、もう一度読みたいと探していた詩に出会うことができて心が震えた。『川のゆくえ』が載っていなかったことはちょっと残念だったけれども……。

この本のあとがきで詩人の川崎洋は、次のように述べている。

……　哀しみを持たぬ人間はいない。わたしなどはそれを意地で隠したり、しゃれのめしたりすることで回避する傾向にあるが、大木詩の場合はまともに心の肌で触れ詩の言葉へまっすぐ導く。しかしそれは単なる詠歌として流し去り感傷に酔うというのでは決してない。底には常に向日性の小さいが消えることのないうねりがある。だから、大木詩の哀しみの詩は、人の哀しみを癒しながら、それを明るい方向へやさしく押しやる見えない力がある。……

私は常々、大木実の詩はどうしようもない哀しさや貧しさを描きながら、読めば、あたたかい癒された気持ちになるのはどうしてだろう、と疑問に思っていたが、川崎洋のこの一文は即座にこの疑問を解決してくれた。

ドイツの文学者、エーリッヒ・ケストナーの詩集に『人生処方詩集・家庭薬局』がある。

目次に「次の場合に、読むこと」とあって、「夫婦生活がだめになったら」とか「孤独に耐えがたくなったら」という症状が書いてあり、それぞれに処方する詩が載っているというユニークな詩集である。

その中の「貧乏神に出くわしたら」というところに『最初の絶望』という詩がある。パンを買いに行った少年がお金を落としてなくしてしまう話である。湖へ水を汲みに行き、帰りにパンを買っておいでとおかみさんに五十スーを渡され、それをなくしてしまうコゼットの話に似ている。いやコゼットにはジャン・バルジャンという救世主が現れるが、ケストナーの詩はお金をなくしたままで、救われるところがない。読んでいる私たちも暗い気持ちになる。しかしケストナーはこの詩を、「貧乏神に出会ったら読みなさい」と言っているのだ。

これは大木実の詩に通じる。どうしようもなく暗く哀しい貧しさの中で、呻き、唸りながらも実は懸命に生きている人間に共感するからこそ、読んでいる私たちは希望が持てるのだろう。そしてそれが川崎洋の言う「向日性の小さいが消えることのないうねり」なのだろう。

大木実は第四詩集『遠雷』の「後記」で、（いわゆる「私小説」に対して私の詩は「私詩」とも謂うべきであろうか。これらの系列の詩のみが私の総てではないが、これらの系列の詩が今日までの私の詩の主流を形づくって来たことも確である。詩のうえでひとりの人間の成長過程を通じて生きる意義を追求し、それは究極に於て「家」というものに現されている。古来からの生活精神、伝統継承の美風を、更に発展させつつ未来へ享け継いでゆくことに生命の在りかたを見出したことであった）と述べている。

最後の詩集『年暮れる』に掲載されている八木憲爾との対談では、私小説のことを、（私小説の世界は狭いし、事実とフィクションがないまぜですが、作者の本音のところ、つまり肉声と呼吸に直接ふれられる思いがする。それは文学のも

つ醍醐味です。私小説が、まったく滅びたときは文学はなくなって、読み物だけになってしまうのではないでしょうか）と発言している。

私小説といえば平成の私小説作家、第一四四回芥川賞受賞の「西村賢太」が思い浮かぶ。大木実と西村賢太、紳士と無頼派とでも言おうか、考えようによっては、正反対の二人である。照れもなく、妻に「君が好きだよ」と公言し、市役所に勤め、家族を愛し、真面目でつつましやかな生涯を送った大木実、性欲と嫉妬にまみれ、暴力的で買淫を繰り返すＤＶ男の西村賢太。

西村賢太が文壇デビューしたのは二〇〇四年、その時大木実はこの世にはいない。接点をしいて挙げるなら、大木実は西村賢太が師と仰ぐ藤澤清造を自宅に訪ねて行って、会ったことがあることと、藤澤の代表作『根津権現裏』の舞台である根津に住んでいたことがある、ということだろうか。それは不思議な縁であるが、西村賢太との接点にはならない。けれど私には二人が重なって見えるのだ。

西村賢太の小説は、主人公の、あさましさ、愚かさ、情けなさ、いじましさ、おかしさ、哀しさ、寂しさ、痛ましさ、を徹底して自虐的に描き、人生の底辺を開けっぴろげにさらけ出し、そこで呻吟しながらも、実はしたたかに生きている人間を自分になぞらえて描いていて、それが彼の作品の魅力であり、力であるのだが、大木実の詩にも共通点が多々ある。西村賢太ほどに凄絶でないので、見逃してしまいがちだが、貧困と病気にあえいだ大木実の青春時代もかなりのもので、暗く哀しい生活は西村賢太と重なる。

数は少ないけれど、性衝動に苦悩する姿や万引きを告白した詩もある。穏やかで誠実な表面に隠された激しいものを感じるのは私だけであろうか。

大木実、西村賢太、どちらの作品からも、貧しさの中で人生の底辺を素直にさらけ出し、本音で語り、したたかに生きようとする姿が鮮明に浮かび上がる。だからこそ読者である私たちは共感を覚え、希望を感じるのだと思う。それはまさしく「私小説」と「私詩」である。

少年少女向きにやさしく詩を解説した『美しい詩を作った人たち』（昭和四十一年、さえら書房）では詩について大木実は、こんな風にやさしく子どもたちに語りかけている。

……すぐれた詩は、人のこころをうちますが、そこには必ず作者の深い感動がこもっているのです。詩は、生活からはなれた遠いところにある絵そらごとではなく、私たちの生活とともにあり、私たちの身のまわりにあるのです。よい詩はよいこころから生まれます。言いかえれば、よい詩を書くということは、まじめに人生を生きることと同じなのです。……

これは大木実の詩に対する姿勢そのものだろう。真面目に誠実に人生を生き、自分のありのままの生活を、恥ずかしい部分も含めて、平易な言葉で、しかし高い次元まで昇華させて表現した大木実、その詩はモーツァルトに似ている。

モーツァルトの音楽は陰影とうるおいに満ちている。ピアノ協奏曲第二十六番（戴冠式）の第二楽章のテーマなどは、わずか四つの音しか使っていない。でも

その単純なメロディーを聴くと、何ともやさしい幸福な気分に浸ることができる。こんな単純なメロディーがどうしてこんなにも人の心に染み入るのか不思議だが、それがモーツァルトの天才といわれる秘密なのであろう。そのやさしさはまさしく大木実の詩だ。

私は今、モーツァルトのピアノ協奏曲第二十番の二楽章を聴いている。決して複雑でない淡々とした音の進行が、こんなにもやさしさや透明な哀感を感じさせ、切々と胸に響いてくるのはどうしてだろう。

生きているということは
モーツァルトを聴けるということだ
そして
大木実が読めるということだ

四

七十の夏
けさ　野田宇太郎さんの
死のしらせを聞く
野田さんは七十四才
僕より　四才年上だ

丸山薫先生が
亡くなったのは
七十五才だった
十年前になる

人は死ぬ
いつか誰も死んでゆく
そのいつかは　僕はいつ？

父は七十の夏死んだ
七十の夏　ことしの夏を
僕は生きている

『七十の夏』（昭和六十二年）

大木実の詩に魅せられて読み進めていくうちに、本来の蒐集癖が頭をもたげ、「全部の詩集を集めたい」と思うようになってしまった。古稀を記念して昭和五十九年に出版された『大木実全詩集』には、三百八十五編の詩が掲載されていて、作品のほとんどは読むことができ、探し求めていた『川のゆくえ』もそこには載っていたので、それで満足すればいいものを、全詩集未掲載の作品を読みたい、という欲求は抑えることができなかった。

しかし大木実の詩集はそんなにたやすくは入手できなかった。めぼしい古書店の目録を購読し、大木実の文字を発見する度に、大喜びして注文するということが続き、一冊一冊集めていった。

二十年以上の歳月を費やし、ようやくほとんどの出版物を手に入れることができた。中には著名な作家の蔵書印が押されている本があったり、砂子屋書房の社主、山崎剛平のサインの入ったものがあったりして、歴史を感じさせた。

戦中、戦後すぐの出版のものは紙質も劣悪で、当時の世相を物語るものであったし、数は少ないが、戦時下の戦争詩のような作品も数点あり、複雑な思いでそれらを読んだ。

特装本の出ているものはそれも入手し、第二詩集『屋根』は、八冊しか出ていない別装本も手に入れ、悦に入っていた。

そういうことで十六冊の詩集のうち、十五冊は手に入れることができたが、第十三詩集『七十の夏』と詩画集『うばぐるま』、少年詩集『ふしぎなめがね』の三冊はどうしても手に入れることができなかった。

東京の詩集専門の古書店「石神井書林」の店主の内堀さんは「まだ新しいですからねえ、そのうち絶対手に入りますよ」と言ってくれたが、その「そのうち」はなかなかやってこなかった。それぞれ、百五部、三十五部、百部の限定出版なのだから、おいそれとは市場に出ないだろうということは想像できた。

詩画集『うばぐるま』と少年詩集『ふしぎなめがね』は選詩集だから、作品は他の詩集で読むことができる。しかし『七十の夏』の作品は他で読むことができない。全詩集と思潮社の詩集には一部が載っているが、それはほんの数編である。第一、題名になっている『七十の夏』はどこにも載っていないのだ。

インターネットの図書館検索で調べてみると、全出版物を揃えているという、国立国会図書館にはなく、全国でたった一館、さいたま文学館が所蔵していた。さすが大木実の住んだ県だけのことはある。おまけにさいたま文学館は大木実の著作を全部揃えていて、『うばぐるま』も『ふしぎなめがね』もあることがわかった。

昨年の十月末、神田神保町の古本まつりに行った際、翌日、さいたま文学館に立ち寄った。さいたま文学館は埼玉県桶川市にある。

上野駅から高崎線に乗る。各駅停車で四十分、上野から十番目の停車駅が桶川である。荒川を過ぎ、埼玉県に入ると、高層マンションや駅前の総合ビルの中を進み、だんだんと田畑や林を垣間見ながら、新興住宅の間を抜けると、アッという間に桶川に到着してしまった。

駅から大きな陸橋でデパートにつながっていて、そのデパートには入らず階段を降り、周りをぐるりとまわると、街路樹のきれいな大きな道に出た。しばらく歩くと公園に着き、そこに円形の洒落た建物があり、そこがさいたま文学館だった。入口から二階に上がり、廊下のようなベランダのようなところをぐるりと回る。図書館は一番奥にあるらしく、外見のモダンさに比べて、「どうしてこんなに歩かされるのだろう」と疑問に思いながら図書館の受付にたどり着く。十人以上の人が並んでいるのでびっくりして、「何と人気のある図書館だ」と思っていたら、その日は映画会があり、行列の人たちは映画を見る人たちだった。

図書館は思ったより狭く、こぢんまりした施設で、ここは郷土の作家の著作を中心とした特別な図書館のようだった。受付の近くにロッカーが設置され、そこに荷物を全部預けて入場する。大木実の本は十冊あまり書架にあったが、目当ての三冊はそこにはなかった。受付に申し出て書庫から出してもらう。いよいよ『七十の夏』と対面できるのだ。

『七十の夏』はA5判の小さい本で、梶山俊夫の装丁、表紙には赤茶と黒の二

色で抽象的な線画が描かれていた。全ページに一目で手漉きと分かるような和紙が使われていて、奥付には、飛騨山中和紙柏木幹夫と紹介までされていた。ページをめくると、小さい活字で「大木実詩集」とだけあり、その次のページに、大木実の毛筆の直筆で、識語署名というのだろうか、七十の夏／ことしの夏を／僕は生きて／いる／大木実　と書かれてあった。

それだけでもう私はグッときてしまう。箱も表紙も使われている紙も装丁も、凝りに凝ったもので、それは家蔵本の限定十八部出版のものであった。（他に限定八十七部のものもあるのだが、そっちはこの図書館にはなかった）

「コピーはだめです。書き写すのもご遠慮ください。どうしても必要のある時は、備え付けのメモ用紙に備え付けの鉛筆で行ってください」という厳しいことだったので、とりあえず閲覧ブースで読んでみることにする。

今まで知らなかったもので、心を動かされる詩がたくさんあった。『七十の夏』『ホルン』『ぐず』『年上の女』『少年』『朝顔の蕾』『海鳴り』……　中でも『海鳴り』は四日市の富田浜で心ひかれる女の人と四日間過ごした、淡い恋の詩で、富田浜の近くの学校に勤めたことのある私にとって、松林のこもれ陽の描写は、目の前に二人の姿が浮かんで来るようだった。

『ジャン・クリストフ』を本屋に買いに行って、店員の少女に恋心をいだいた少年の日の思い出の『少年』、ホルンの音色と丸山薫の詩を重ね合わせた『ホルン』、……

ちょっと暗い館内の個別に仕切られたブースの中で、なつかしいような、せつないような、そんな気持ちでメモ用紙として渡された広告の裏に、備え付けの鉛筆で夢中になって作品を写し取っている私がいた。

この『七十の夏』と『蝉』の頃が大木実の最も円熟していた時ではなかろうか？東日本大震災の後、天声人語で取り上げられた『日本のさくら』（蝉）、川崎洋が絶賛した『モーツァルト』（七十の夏）以外にも二つの詩集には傑作が多数あるし、何より、大木実のやさしさや哀感が一番よく出ていると思うのだ。

『ふしぎなめがね』と『うばぐるま』も見せてもらう。どちらも梶山俊夫装丁、終日閑房の出版で、飛騨山中和紙柏木幹夫というのも『七十の夏』と同じであった。

『ふしぎなめがね』は少年詩の選詩集で、著者のあとがきに、（私のなかにいるひとりの少年が、私にこれらの詩を書かせました。寂しがりやで孤独な彼に、一冊の詩集を編んでやりたいと思う私の願いを、西澤賢一さんが叶えてくださいました。）とあり、全部で二十五編の詩が収められていて、老いて尚も少年のこころを持ち続けた大木実の、珠玉の詩がそこにはあった。

『うばぐるま』は詩画集で、大木実の各詩集（場末の子から蝉まで）から一作ずつを選んで、梶山俊夫が和紙にうぐいす色と黒で抽象的な水墨画のような画を描いたものを、十四枚、畳紙に入れて出されたもので、限定三十五部、大木も梶山も出版の西澤賢一も、もうこれは楽しんで作ったとしか言いようのないもの

で、三十五部はどんな人が手に入れたのだろうと、うらやましい気持ちでいっぱいだった。

第十詩集『冬の支度』からは有名な『前へ』が選ばれている。

……

辛いこと、厭なこと、哀しいことに、出会うたび、

僕は弱い自分を励ます。

――――前へ。

ほんとうに、辛いこと、厭なこと、哀しいことがあるたびに、「前へ」と自分を励まし、奮い立たせていたんだなあ……、「人生を楽しむことを知らず寂しい人生でした」と八木憲爾にあてた遺書の末尾に書いた大木実、少し道徳的に感じ、今まであまり好きでなかったこの詩が、何故か急に輝きを持って心に迫ってきた。

三冊の本を机の上に置き、いとおしむように表紙をなでまわしながら、時が過ぎて行くのを惜しむように、私はいつまでもその場に座っていた。

私も後二年で七十の夏を迎える。中学一年で初めて大木実の詩に出会ってから、何度その詩に励まされてきただろう。暗く哀しい詩でありながら、読むとなぜかやさしい救われた気持ちになる。才能もセンスもない私は、よい詩は書けないけれど、大木実の詩に囲まれて真面目に残りの人生を生きることはできそうな気がする。

私の新たな目標は七十の夏までに『七十の夏』を手に入れることだ。

大木実の詩集に囲まれながら、今日もモーツァルトを聴いている。深い喜びと、大きな幸せを感じながら……。